

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：13701
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：19K12952
研究課題名（和文）インド仏教最後期の論書が伝える有部説 『有為無為決択』第二章から第十二章の研究

研究課題名（英文）The Sarvastivada Theory Expounded in the Treatise That Belongs to the Last Historical Stage of Indian Buddhism: a Study of Chapter II-XII of the Samskratasamskrtaaviniscaya

研究代表者
横山 剛（Yokoyama, Takeshi）

岐阜大学・高等研究院・特任助教

研究者番号：10805211
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：インド仏教において大きな勢力を誇った派閥のひとつに説一切有部がある。本研究では、ダシャバラシュリーミトラ（12世紀頃）が著した『有為無為決択』を用いて、有部の教理がインド仏教の最後期へと伝承される際の系譜や教理的な展開の解明に取り組んだ。この研究を通じて、インド仏教の終焉期へと伝えられた有部説の具体的な内容が明らかとなった。また、大乘仏教の思想にもとづく教理的な改変が部分的になされていることが確認された。以上の結果は、インド仏教において有部の教理が基礎学として確固たる地位を占めていたことを示すとともに、大乘仏教が興隆した後も有部の教理が連綿と伝承されていた事実を示すものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、ダシャバラシュリーミトラ著『有為無為決択』を用いて、インド仏教において大きな勢力を誇った説一切有部の教理がインド仏教の最後期まで伝承される際の系譜や教理的展開の解明に取り組んだ。この研究を通じて、有部の教理が仏教の基礎学として重視され、大乘仏教の思想の影響を受けながらも、インド仏教の終焉期まで連綿と継承されていたという事実とその内容が明らかとなった。これによって、有部の教理が部派仏教を代表する思想であるにとどまらず、インド仏教全般においてその基礎を支える知識としての役割を果たしていることを具体的に示すとともに、仏教研究における有部教学の重要性を改めて提示することができた。

研究成果の概要（英文）：The Sarvastivadas was one of the most influential sects of Indian Buddhism. In this project, using the Sanskratasamskrtaaviniscaya of Dasabalarimitra (ca. 12c) as main text, I did research on the textual and doctrinal lineages that had transmitted Sarvastivada theory to the last historical stage of Indian Buddhism. Through the investigations, I clarified the specific contents of their theory that had been transmitted and pointed out that the doctrinal modifications that are based on the thought of Mahayana Buddhism are found in some parts. The result of this study presents the fact that Sarvastivada theory was a doctrinal basis of Indian Buddhism and was transmitted continuously even in the historical stages where Mahayana schools had great influence.

研究分野：仏教学

キーワード：インド仏教 最後期 アビダルマ 説一切有部 基礎学 ダシャバラシュリーミトラ 有為無為決択
牟尼意趣莊嚴

1. 研究開始当初の背景

仏教の原点であるインド仏教では、釈尊の入滅後程なくして、教理や戒律に関する意見の相違が原因となり、部派分裂が起こった。数ある部派の中で説一切有部 (Sarvāstivāda) は大きな勢力を誇ったが、有部の教理はそれらの部派を代表する教理であるにとどまらず、その後の大乘仏教の誕生と展開においても重要な役割を担う。有部の教理を基礎として新たな教理を構築したり、有部の教理を批判してそれを乗り越えようとするなど、大乘仏教の思想的な背景の一つに有部の教理がある。大乘仏教の中観派や瑜伽行派の思想が成立するためには有部の教理が不可欠である。このように有部の教理はインド仏教の基礎学としての性格を有する。そして、有部説は大乘仏教が興隆した後も連綿と伝えられ、インド仏教の最後期まで継承されることになる。このような伝承の過程において、有部内のいかなる教理が継承され、またどのような変容を遂げたのかという点の解明は、インド仏教の教理的な基盤の実態を明らかにするために不可欠である。

2. 研究の目的

インド仏教の教理的な基盤としての有部説の実態を明らかにするために、本研究ではインド仏教最後期の論書が伝える有部説を起点として、そこへと至る伝承の系譜を辿り、その内容と変遷の解明に取り組むかたちで研究を進める。主な文献としては、チベット語訳のみが現存する、ダシャバラシュリーミトラ (Daśabalaśrimitra, 12世紀頃) の『有為無為決択』 (*Dus byas dan 'dus ma byas rnam par nes pa*, デルゲ版 No. 3897, 北京版 No. 5865) を使用し、全三十五章の中から有部の説が紹介される第二章から第十二章 (デルゲ版 ha 110a2-179a1, 北京版 ño 6b6-90b3) を研究の対象とする。

3. 研究の方法

本研究は文献学的な手法にもとづくものであり、研究の基礎をなすテキスト研究とそれにもとづく思想研究からなる。

テキスト研究では、『有為無為決択』の該当章に対して、使用可能な版本と写本を用いて、比較校合を行いながら読解を進め、和訳を行う。以上のテキスト研究の成果にもとづいて思想研究に取り組む。

思想研究では、『有為無為決択』が伝える有部説を、継承と変容という二つの点から分析する。継承については、同論が説く有部説がどのような有部論書の教説 (あるいは、どのような大乘論書が伝える有部説) を踏襲しているのかという点を検討する。その際には、有部の教理の中でカシミール有部とそれ以外の派閥で解釈が分かれる教理について、同論がカシミール派の説を採用しているのか、あるいはそれ以外の派閥の説を採用しているのかという点に注意を払う。次に、変容については、『有為無為決択』に説かれる有部説を有部論書に説かれる実際の有部の教理と比較し、差異がみられる部分を回収する。そして、これらの部分を大乘仏教の教理にもとづいて新たな解釈や修正がなされている部分とそれ以外の部分に分ける。前者については、具体的に大乘仏教のいかなる教理から影響を受けているのか、そしてどのような大乘論書からの影響が考えられるかという点を検討する。後者に関しては、本来の有部説からの変容にいかなる理由が考えられるのかを、インド仏教の思想全体を考慮に入れながら、検討する。

4. 研究成果

本研究では、有部教学の原理論に相当する法体系 (いわゆる「五位七十五法」) が説かれる第九章を起点として、テキスト研究や思想研究を他の章に広げるかたちで、研究を進めた。報告者は本研究を開始するに先立って、有部の法体系の伝承について『入阿毘達磨論』→『中観五蘊論』→『牟尼意趣莊嚴』→『有為無為決択』という系譜が想定されることを見出し、特に著者が同じ学統に属する『牟尼意趣莊嚴』と『有為無為決択』の関係に注意を払いながら、本研究に取り組んだ。テキスト研究と思想研究で得られた成果の概要を以下に述べる。

(1) テキスト研究

本研究の起点となる第九章については、章全体の和訳を前後半に分けて論文として発表した。また、前半部のチベット語訳の批判校訂本を論文にまとめて発表した。後半部も発表の準備が整っており、近く論文として投稿することを予定している。このように第九章については、和訳とテキストの発表をほぼ完了することができた。今後は、第三章 (器世間) と第四章 (有情世間) のテキスト研究の成果を順次発表することを予定している。この二章を読解する際にも、『牟尼意趣莊嚴』の該当箇所を読解を並行して行った。『牟尼意趣莊嚴』の研究は、李学竹氏 (中国蔵学研究中心) と加納和雄氏 (駒澤大学) と共同で行い、器世間の和訳を前後半に分けて論文として発表した。

当初の予定では、主要文献である『有為無為決択』のチベット語訳の批判校訂テキストを作成しながら読み進める予定であったが、諸版を比較校合する作業に多くの時間と労力を必要とし、読解が進まないという問題が生じた。そこでテキストの校訂作業と読解を切り離し、当面はデル

ゲ版を用いて読み進め、読解が困難な箇所についてのみ、比較校合の作業を行った。一方で、テキスト校訂については、進捗の度合いに差が出るようになったが、読解の後を追うかたちで、時間をかけて取り組んだ。このような方針で読み進めることで、理解が難しい箇所や読みが未確定な場所を残しながらも、第十章まではひと通り読み終えることができた（各年度に読んだ箇所はおおよそ次の通り：[2019年度] 第九章、第二章～第四章、[2020年度] 第五章～第七章、第八章の一部、[2021年度] 第八章の残り、第十章の一部、[2022年度] 第十章の残り）。しかし、最後の第十一章と第十二章については、時間の都合上、プロジェクトの期間中に読解することができなかった。

（２）思想研究

『有為無為決択』へと至る有部説の継承の中で、有部の伝統的な教理には見られず、外部に由来する教説の例として、心相応行中の解脱 (vimukti) に注目した。このような解脱に対する特殊な理解は『中観五蘊論』に端を発するものであり、本研究では、同論において解脱が心相応行とされる理由を、勝解 (adhimokṣa) の定義との関係から、明らかにした。また、外部由来の教理のその他の例として、『有為無為決択』と『牟尼意趣莊嚴』で説かれる十二の要素からなる智 (jñāna) に注目し、大乘仏教の般若経からの影響について考察を進めている。

さらに『有為無為決択』へと至る系譜の重要な経路点のひとつである『中観五蘊論』に関しては、その著者問題の解決に取り組み、チャンドラキールティ真作の証明に向けて研究を前進させることができた。また、本研究で得られた知見も一部を交えながら、2021年2月に同論の全訳を起心書房から刊行した。

以上で述べた『有為無為決択』やそれに直接的に関係する文献の研究成果を論文などにまとめて発表するだけでなく、本研究で得られた成果の一部を、報告者が個人で取り組むセヴァスバンドゥ著『五蘊論』の研究、ならびに「五位七十五法」「自性」といった教理の研究に応用し、その成果を論文などにまとめて発表した。さらに『阿毘達磨集論』『俱舍論安慧疏』『破僧事』の共同研究、ならびに斎藤明氏（国際仏教学大学院大学）が代表を務める科研費プロジェクト「パウダコーシャの総括的研究」（19H00523）にも、本研究で得られた知見の一部を提供し、その成果を論文や著書などにまとめて発表した。

本プロジェクトにおける4年間の研究により、インド仏教の最後期へと伝えられた有部説の具体的な内容が明らかとなった。また、伝統的な有部説からの逸脱が見られる箇所に関しては、大乘仏教の思想からの影響が顕著であることが判明した。このように、テキスト研究と思想研究の両面において、新たな知見が得られ、研究を前進させることができた。また、幸いなことに、報告者は2022年9月に日本印度学仏教学会賞を受賞したが、本研究で得られた成果や知見の一部も、受賞理由となった研究の基礎の一端をなしている。

一方で、テキスト研究を中心に、本研究で得られた成果を整理して論文のかたちにまとめるのに予想以上の時間と労力を必要としており、未だに整理や発表ができていない成果も数多く残されている。本プロジェクト期間が終了した後も、研究を継続し、これらの成果を学会発表や論文において、順次発表してゆくことを予定している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 17件 / うち国際共著 8件 / うちオープンアクセス 17件）

1. 著者名 YOKOYAMA Takeshi	4. 巻 70-3
2. 論文標題 The Ninety-Eight Proclivities (anusaya) in the Madhyamakapancaskandhaka: Further Evidence for Candrakirti's Authorship	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 85-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 横山剛	4. 巻 3
2. 論文標題 チベット文和訳『有為無為決択』第九章後半部 漏から章の結びまで	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 対法雑誌	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 李学竹, 加納和雄, 横山剛	4. 巻 25
2. 論文標題 梵文和訳『牟尼意趣莊嚴』 器世間解説前半部	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 インド学チベット学研究	6. 最初と最後の頁 20-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 阿毘達磨集論研究会 (那須良彦, 加納和雄, 李学竹, 吉田哲, 松下俊英, 早島慧, 横山剛, 高務祐輝, 間中充, 吹田隆徳, 田中裕成, 奥野自然, 中山慧輝, 向田泰真)	4. 巻 25
2. 論文標題 梵文和訳『阿毘達磨集論』(6) アーラヤ識の存在論証	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 インド学チベット学研究	6. 最初と最後の頁 63-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 加納和雄, Jowita Kramer, 横山剛, 田中裕成, Sebastian Nehrdich, 中山慧輝, 小南薫	4. 巻 3
2. 論文標題 律儀獲得の範囲と動機 俱舍論安慧疏・業品第36偈ab句の梵文和訳	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 対法雑誌	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 漢訳仏典研究会 (加治洋一, 杉本瑞帆, 田中裕成, 富田真理子, 中西麻一子, 横山剛)	4. 巻 3
2. 論文標題 漢文読解『破僧事』巻第一	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 対法雑誌	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 横山剛	4. 巻 2
2. 論文標題 チベット文和訳『有為無為決択』第九章前半部 導入から纏まで	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 対法雑誌	6. 最初と最後の頁 111-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加納和雄, Jowita KRAMER, 横山剛, 田中裕成, Sebastian NEHRDICH, 中山慧輝, 小南薫	4. 巻 2
2. 論文標題 律儀の獲得 俱舍論安慧疏・業品第35偈の梵文和訳	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 対法雑誌	6. 最初と最後の頁 63-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 YOKOYAMA Takeshi	4. 巻 69-3
2. 論文標題 Sutra Citations in the Madhyamakapancaskandhaka: Evidence for Candrakirti 's Authorship	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 115-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿毘達磨集論研究会 (那須良彦, 加納和雄, 李学竹, 吉田哲, 松下俊英, 早島慧, 横山剛, 高務祐輝, 間中充, 吹田隆徳, 田中裕成, 奥野自然, 中山慧輝, 向田泰真)	4. 巻 24
2. 論文標題 梵文和訳『阿毘達磨集論』(5)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 インド学チベット学研究	6. 最初と最後の頁 183-218
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Yokoyama Takeshi	4. 巻 68-3
2. 論文標題 Liberation Classified into the Forces Associated with the Mind in the Madhyamakapancaskandhaka	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 81-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 横山剛	4. 巻 1
2. 論文標題 大乘仏教と有部教学の接点としての諸法の体系 『五蘊論』における世親の著作姿勢を例に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 対法雑誌	6. 最初と最後の頁 65-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿毘達磨集論研究会（那須良彦，加納和雄，李学竹，吉田哲，松下俊英，早島慧，横山剛，高務祐輝，間中充，吹田隆徳，田中裕成，奥野自然，中山慧輝）	4. 巻 23
2. 論文標題 梵文和訳『阿毘達磨集論』（4）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 インド学チベット学研究	6. 最初と最後の頁 27-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 横山剛	4. 巻 71-3
2. 論文標題 Tson kha pa 's Doubts about Candrakirti 's Authorship of the Madhyamakapancaskandhaka	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 129-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takeshi Yokoyama	4. 巻 5
2. 論文標題 Chapter IX of the Samskrtasamskrtaviniscaya, A Critical Edition of the Tibetan Text, the First Half: from Opening Remarks to the Section on Envelopment (paryavasthana)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Bulletin of the International Institute for Buddhist Studies	6. 最初と最後の頁 81-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 李学竹，加納和雄，横山剛	4. 巻 26
2. 論文標題 梵文和訳『牟尼意趣莊嚴』 器世間解説後半部	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 インド学チベット学研究	6. 最初と最後の頁 24-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 阿毘達磨集論研究会（加納和雄，李学竹，吉田哲，松下俊英，早島慧，横山剛，高務祐輝，間中充，吹田隆徳，田中裕成，奥野自然，中山慧輝，向田泰真，小谷昂久）	4. 巻 26
2. 論文標題 梵文和訳『阿毘達磨集論』（7） 界と処の設定など	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 インド学チベット学研究	6. 最初と最後の頁 39-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 『中観五蘊論』に説かれる随眠説
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第72回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 法の自性とは何か 『中観五蘊論』の読解を通じて考える
3. 学会等名 2021年度第2回「科学と仏教思想」研究会（埼玉工業大学）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 有部アビダルマの法体系が担う役割と機能について考える 『中観五蘊論』を手掛かりに
3. 学会等名 令和3年度第2回パウダコーシャ・プロジェクト全体研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 心不相応行を構成する諸法について 普光『俱舍論記』を視野に入れた考察
3. 学会等名 部派仏教研究会第13回会合
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 『中観五蘊論』にみられる經典引用について
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第71回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 滅尽定と想受滅の定義をめぐって
3. 学会等名 パウッダコーシャ・プロジェクト, 公開シンポジウム, 「パウッダコーシャの総括と展望」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 無想定と滅尽定の定義をめぐって
3. 学会等名 令和2年度第1回パウッダコーシャ・プロジェクト, 全体研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 アビダルマとは何か 『俱舎論』冒頭部の読解を通じて
3. 学会等名 2020年度第2回「科学と仏教思想」研究会（埼玉工業大学）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 「煩惱を断つ」とはいかなることか 『俱舎論』が説く法の理論から考える
3. 学会等名 2020年度第3回「科学と仏教思想」研究会（埼玉工業大学）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 『五蘊論』における世親の著作姿勢 大乘仏教と有部教学の接点を考えるために
3. 学会等名 部派仏教研究会第9回会合
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 『中観五蘊論』における心相応行法としての解脱について
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第70回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 大乘仏教と有部教学の接点としての諸法の体系 『五蘊論』における世親の著作姿勢を例に
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第70回学術大会パネル発表
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 アビダルマの法体系を略説する三つの小論をめぐって
3. 学会等名 大正大学総合仏教研究所公開講座（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 『中観五蘊論』の慧の心所以外にみられる經典引用について
3. 学会等名 部派仏教研究会第10回会合
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 ツォンカバが提起する『中観五蘊論』の著者問題
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第73回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 説一切有部と中観派における自性理解の差異をめぐって チャンドラキールティ著『中観五蘊論』を手掛かりとして
3. 学会等名 東海印度学仏教学会第68回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 法の体系が担う役割と機能をめぐって 『中観五蘊論』に基づく考察
3. 学会等名 第66回国際東方学会会議（東京会議）, Symposium V「仏教思想は甦るか パウツダコーシャ・プロジェクトを総括する」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山剛
2. 発表標題 二無我から見る有部の法概念
3. 学会等名 部派仏教研究会第14回会合
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Izumi Miyazaki, Takeshi Yokoyama, Eisaku Okada, Yuki Takatsukasa, Genkai Hayashi, Keiki Nakayama, Tatsunori Takeda, Kaworu Kominami	4. 発行年 2022年
2. 出版社 The International Institute for Buddhist Studies	5. 総ページ数 150
3. 書名 The Seventy-five Elements (dharma) in the Madhyamakapancaskandhaka, Baudhakosa: A Treasury of Buddhist Terms and Illustrative Sentences, Volume VIII	

1. 著者名 斎藤明, 清水尚史, 生野昌範, 横山剛, 伊集院栞, 王俊淇, 楊潔, 王楠, 劉暢	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山喜房佛書林	5. 総ページ数 351
3. 書名 ステイラマティ『五蘊論釈』における五位百法対応語（仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集、パウッタコーシャ X）	

1. 著者名 横山剛	4. 発行年 2021年
2. 出版社 起心書房	5. 総ページ数 292
3. 書名 全訳 チャンドラキールティ 中観五蘊論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------